

提出 2025 年 9 月 日

中央大学文学部 学外活動奨学金

ヴィクトリア時代の外交政策の背景にある思想とその起源を調査

中央大学文学部人文社会学科西洋史専攻

岸 佑真

目次

はじめに

- 1, 研究内容
- 2, 日本の現状
- 3, 研究の意義
- 4, 今回の目的
- 5, 報告書の前提

調査内容

- 1, インタビュー
 - A, Geoffrey Hicks 教授
 - B, David brown 教授
- 2, アビー・ハウス
- 3, ポートレイト・ギャラリー
- 4, tate ブリテン
- 5, 大英博物館
- 6, 大英図書館
- 7, 国立文書館

まとめ

- 1, 日本での研究とイギリス人研究者との違い
- 2, 今後の展望

はじめに

1, 研究内容

私は 1789～1890 年代の外交史について研究しており、特にパーマストンという政治家に焦点を当て研究をしている。パーマストンは自由党の政治家で、日本の研究では「砲艦外交」と呼ばれる強硬外交を行い、各国へ海軍力を背景に要求を聞かせる一方で、ウィーン体制下で行われた諸列強の衝突を防ぐために行われた会議外交を行った。

パーマストンはグレイ内閣下で外務大臣、その後二度の内閣総理大臣就任を果たした彼であったが、外務大臣と第一次内閣時には議会では強硬的な発言を繰り返し、干渉政策に積極的な姿勢をしましたが一方で第二次内閣ではその姿勢は一転し、消極的な姿勢を示した。この原因として君塚直隆教授は秘密文書でダービーが議決で協力関係を求める代わりに不干渉政策を行うように圧力をかけたためと説明した。

2, 日本の現状

現在日本ではナポレオン戦争時代の 1789 から第一次世界大戦直前の 1890 までのイギリス外交史を主とした研究をしている研究者はおらず、英語で書かれた専門書も一箇所に固まって存在するのではなく、数冊が日本の至る大学に点々と入庫されている。

特にパーマストンを中心に私は研究をしているが、当時の政治状況を理解するために保守党や自由主義者、当時の国民の感情と言ったものを推し量る材料となる研究は少なく、この分野を研究すべきかなどの相談も厳しい状況だった。

3, 研究の意義

この研究は「長い 18 世紀」の間ヨーロッパが戦争を続け、ナポレオン戦争という転換点を超えて国際協調システムが構築された中でその枠組が如何にして崩壊していったのかまたその崩壊していった原因についての歴史を明らかにするものである。

現代社会においても、第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦という長い戦争の歴史を超え、国際連合や EU のような広い範囲で国際協調システムが誕生し、その中で資本主義国家と旧社会主義国家の対立のようにその綻びが現れてきている。

このような状況だからこそ国際体制が如何にして壊れていくのか、どのように維持されていくべきなのかについての歴史であるため今こそ知るべき物がある。

4, 今回の目的

私の調査内容はイギリスの研究者にインタビューをし、それと同時に大英図書館で書籍を PDF 化することを主題に引き、博物館に行き当時の政治家や将軍がどのような評価を受け、国民がどのように彼らを見ていたのかについて調査する。

またそれを通じてヴィクトリア朝時代の政治家のどのような思想に国民は共感し、またどのようなものに忌避感を感じていたのかについて探る。

5, 報告書の前提

31 日間の研究の主は大英図書館での史料になっており, PDF 化した書籍は未だにすべて読み切れたわけではないのでインタビューや美術館, 博物館での研究がこの報告書のメインとなってくるため, 記載しきれない部分も生じてくる。

調査内容

1, インタビュー

今回は Geoffrey Hicks, David brown の二人にインタビューを受けていただきました。Geoffrey Hicks 氏は現在 University of East Anglia に所属しており, 保守党の研究と 1800 年以降のイギリスの政治史、1850 年から 1940 年までのイギリスの外交史、1815 年から 1940 年までのヨーロッパ列強間の関係についての研究をしている。また Daivid Brown 氏は University of Southampton に所属しており, 社会改革と慈善活動の歴史、ヴィクトリア朝時代の自由主義、そしてイギリス外交政策の政治史を研究している。

A. Geoffrey Hicks

Q. 議会内に干渉政策に反対している保守党, 自由主義者がいたにも関わらず, 自由党のパーマストンが干渉政策を行っていたのはなぜか。

当時の政党は保守党と自由党の二大政党制で, 自由党はホイッグ党と自由主義者によって構成されており, 選挙で勝った自由党とはいえ, 保守党の議席も少なくなく, 自由主義者と協力すれば十分抑止力となり得るが, 元々の思想的な視点に立てば保守党と自由主義者は意見が合わず, 根本から反りが合わないために協力することは不可能であった。そのため二大政党制だからといって二項対立的に見るのではなく, 3 つの勢力の中で自由党, 保守党, 自由主義者があり, 第一党の自由党を止めることができなかった。

他にもパーマストンの演説で保守党や自由主義者の中庸派の人々は味方についていたもので, 議会内では自由党の政策が通りやすくなっていた。また選挙では帝国意識, 愛国心によって支持率を集めており, ドンパシフィコ事件のような介入政策は日本の人道的な行為として受け入れられたわけではない。またヴィクトリア女王による反発があったのは事実だがそれが政策に反映されることはなく, 権限としては全く持っていなかったと評価されている。

ヴィクトリア女王の反発は世代の違いを表したものであり, 彼の政策を嫌っていただけで決してパーマストン自体が嫌いであったわけではなかった。世代の違いとはパーマストンは父ジョージ 3 世の治世から政治家として活躍しており, 戦争への忌避感は大きく異なっていた。そのため彼女はパーマストンらを「恐ろしい老人たち」と呼んでいた。

また国民からの支持率を維持する方法はメディアであった。彼は新聞記者とのつながりが強く議会内また王室からの非難があつたとしても議会内での強硬的な発言により、支持率を維持することが可能であつた。このことからパーマストンは近代的な政治家であつたと言える。

Q. カニング外相は自由主義の革命に対して不干渉を貫いていたがウィーン体制は元々反自由主義のものであつたが、対立を生むことはなかつたのか。

ベルギーなどのヨーロッパへの干渉は回避しつつ、南アメリカなどの非ヨーロッパ圏での介入に限っていた。ウィーン条約では領土保存の法則が提唱されていたが、それはヨーロッパ圏のみで適応されており、南アメリカでの独立は大きな問題にはならなかつた。その上会議に出席することはなくとも、イギリスから不満を伝えるだけで、十分な利益が得られたために干渉することはなかつた。そのためアンシャン・レジームの国々とは戦争になることはなく、イギリスの求める市場拡大を果たすことができたため対立はもちろん存在していたが、表立って戦争するほどの対立が生まれることはなかつた。

B. David Brown

Q. 不干渉政策を保守党は支持していたが、どのような思想がその背景にはあつたのでしょうか。またこの起源には歴史的な経験に根付いたつながりがあるのか、イデオロギーの発展によって生まれたものなのか。

保守党の変異やイデオロギー的な根幹の議論はかなり多くあり、保守党の政治思想における継続的な緊張関係として捉えるのが有益だ。この姿勢が確固たるものになるのは1860～1880年のダービーからディズレーリにリーダーシップが取って代わられる時期であつた。この主張についての詳しくはJeremy Black (ed.), *The Tory World: Deep History and the Tory Theme in British Foreign Policy, 1679–2014* (2015), Geoffrey Hicks (ed.), *Conservatism and British Foreign Policy, 1820–1920* (Ashgate, 2011)の2冊をおすすめする。

Q. 当時の政治家には海外への介入に反対をしているのに対してなぜパーマストンは積極的な軍事政策を追求した動機はなんであつたか。

私は私たちはパーマストンの言動と行動の違いに対して注意をしなければならない。彼の考えは彼が本当に行つた行動よりも攻撃的で断定的な言動で表現されることが多かつた。表面的な解答は、これはブラフであるということだ。つまり大げさな発言と威嚇行為は特に比較的小さな出来事に関しては強力な国家というイメージを作りお出すために行わ

れていた。

しかしパーマストン比較的に軍事力を行使することは頻繁には行わなかった。そしてほとんど大英帝国のちからによって利益を構築する能力はますます制限されていた。それ故彼が使った言葉や力強い、自由のような大英帝国のイメージを育んだことはある程度比較的軍縮を行うことを包み隠すために使われた。高い注目を集めた話（あなたが私に質問したであろうことである）ドンパシフィコ事件のような事件はパーマストンが晒される危険性が全くない状態でそのようなイメージを与えるのに重要であった。クリミア戦争も同じようにそのような性格の好例であった。パーマストンは決定的な行動について話した。しかしフランスは実は軍事的に強力な同盟国であったように思っていたし、軍事行動を迫られたときでさえ、彼は戦闘を継続することよりもむしろ交渉をすぐにしたいと考えていた。

Q、パーマストンが干渉政策に関して君主、保守党、自由主義者らからの批判に直面したときなぜドンパシフィコ事件のような行動は人道的な介入として国民から指示を集めることができたのか。

私はフォンパシフィコ事件のようなものが人道的な介入として国民からの支持を得たということは聞いたことがありません。私はこれは愛国心と国の栄光（その主張と養護）二つについて言及している何かではないかと読み取れる。私はこの話について自分の著作の中で触れている。もしこれについてもっと知りたいなら以下の本をおすすめする。

Geoffrey Hicks, 'Don Pacifico, Democracy, and Danger: The Protectionist Party Critique of British Foreign Policy, 1850-1852', *The International History Review*, 26:3 (2004), 515-40

2, アビー・ハウス

A, アビー・ハウスとは



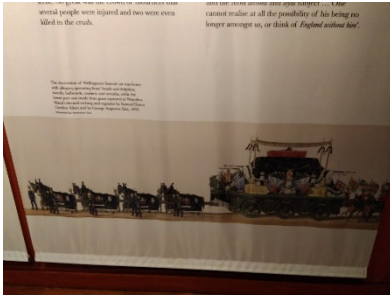
図 1 ウェリントンとはを説明した展示

アビー・ハウスとはナポレオン戦争でフランス軍に勝利したイギリス陸軍將軍ウェリントンに対してイギリス国王ジョージ3世が感謝の気持ちを込めて建てた家で、そこをウェリントンに関連したものの展示場所として活用している施設である。

B, ウェリントンとは

1769 年に Garret Wellesley 家の 9 人兄弟の長男として生まれた。バイオリンの才能に恵まれたが、母親が彼の軍人としてのキャリアを望んだ。そのため 17 のときに軍事学校に彼は送られ、フランスで乗馬、防衛、数学、防衛陣地について学んだ。

1789 年にフランスで革命が勃発するとイギリス軍と合流した。この革命によってヨーロッパが騒乱の渦中に陥った。彼の初めての従軍は 1794 年のオランダからのフランスへの進軍であった。1790 年代には Wellesley はキャサリンと交際する事となり、彼らはダブリンで婚約し、子どもまで儲けることとなった。1792 年にヨーロッパでの対立が始まった頃からナポレオン・ボナパルトはフランス領土を拡大し第一帝政を築いた。そのときにはインドに進軍している最中でそこから多くの経験と技術を得た。1808 年 8 月に彼はポルトガル、スペイン方面から大陸に侵入し、混戦を繰り返す、ビトリアの戦いで勝利を掴む。



ウェリントン卿は 19 世紀でも最も祝われた英雄であった。ワーテルローの戦いでの勝利が彼の最も有名な戦績で、20 年間にも及ぶフランスとの対立に終止符を打ち、これは第一次世界大戦まで続く平和をもたらした。

彼は 83 歳のときに彼はこの世をさり、その続週 200 万人近くが彼のもとに行き、敬意を払い英雄を見送った。

図 2 ウェリントンの遺体搬送の様子

C, ナポレオンに勝利



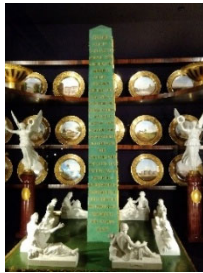
上記の通りナポレオン戦争でポルトガルからスペイン、ベルギーへと進軍し、勝利を収めた。この行為で国王ジョージ 3 世や大英帝国臣民から英雄視され、高い評価をもらっただけでなく、列強諸国からも高い評価を受けていた。それを表した展示として彼に各国から送られた献上品が展示されている。この献上品はプロイセンからとポーランドのようなナポレオンに支配され、大きな被害を受けた国々からの物が多く、大陸での戦争が大陸からの尊敬を集め、人脈を広める重要な要素であった。

以降ウェリントンは外交政策を決めるための列強国間での会議でオブザーバーとなったり、戦争で高まった名声によって首相に任命されたりと軍人としてではなく政治家、

図 3 プロイセンからの献上品

イギリスと大陸列強を結びつける架け橋としての役割を担った。

他にもポーランドのようにナポレオン戦争前にはプロイセン、オーストリア、ロシアによって分割され消滅したはずの国からもそのような献上品が送られており、ナポレオン戦争後のウィーン会議で復活したことがわかる。またその国の君主となった王族は自由主義に



反発しており,旧体制側の勢力となった。

図 4 ポーランドからの献上品

D, まとめ

アビー・ハウスの展示の中にはウェリントン卿のコレクション,当時使っていた軍服が展示され,彼が好んで収集していたオランダの絵画が展示されていた。このことから軍人としてのウェリントンに対しての展示が多く,政治家としての展示はめったになかった。もちろんナポレオンに勝利したことでジョージ 3 世によって建てられた宮殿であるのでナポレオン戦争に関したものが多くなることはあるが,政治家としての展示がほとんどないのは戦争の英雄としての側面が強く,政治家としての影は薄いように感じた。

他にも第一次世界大戦や第二次世界大戦の追悼のオブジェ周辺にはウェリントンの像が配置されており,やはり国王や貴族内のみでなく,イギリス国内でも戦争の英雄としての側面が強い印象がある。



図 5 ウェリントン像



図 6 イギリス国王からの盾



図 7 ウェリントンの肖像画

他にもロンドン市内のオブジェ周辺にもウェリントン像が設置されていた。



図 8 ウェリントン像



図 9 図 8 周辺のオブジェ



図 10 図 5 周辺のオブジェ

3, ポートレイト・ギャラリー

A, ポートレイト・ギャラリーとは

名前の通り肖像画のみを展示した美術館で, British gallery 周辺にある。この展示は中世から現代までの肖像が収められており, 中世には王族, 近世には貴族と王族, 近代（革命後）は政治家や貴族, 現代は芸術家自身を描いたものが展示されており, その横にはその人物と絵画の説明が書かれており, そこから政治家や議会内の様子で当時どのような状況なのか現代はどのように評価されているのかが書かれている。

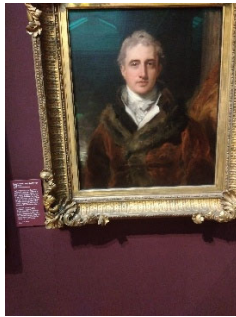


図 11 キャッスルレー肖像画

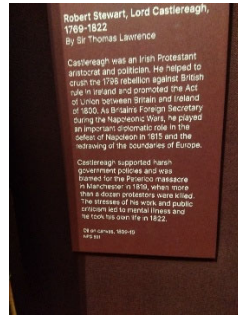


図 12 図 11 の解説

B, キャッスルレー

図 11, 図 12 のキャッスルレーはアイルランド出身のプロテスタント系貴族, 政治家であり, 1798 年のアイルランド法に対する反乱を鎮圧し, 1800 年のイングランドとアイルランドのつながりを強める法律を制定した。またナポレオン戦争後ウェーン会議に外相として出席した政治家で, ヨーロッパの国境線を引き直した。

キャッスルレーは無情な政策を支持しており, ピーターラーの虐殺の責任を負わされた。彼の仕事や公共の場所での非難によるストレスが原因で精神的な病気にかかり 1822 年に亡くなった。

C, ウェリントン

彼はナポレオンを打ち負かしたもっともウェリントンは有名な軍人で当時の政治家として評価されている。図 13 の肖像画は軍人時代ではなく, 首相に就任した 1 年後に書かれた絵画である。彼の省庁での時間はカトリック法改正に対する仕事に費やされていた。



図 13 ウェリントンの肖像画

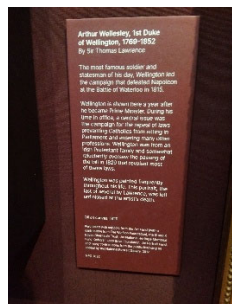


図 14 図 13 の解説

D, パーマストン

パーマストン卿は 2 度内閣総理大臣になっており、彼の自由主義政策は権利の行使、立法化のワクチンのようで、彼に絶大な人気をもたらした。1861 年に彼は奴隷貿易を行っていた拠点であったラゴスを占領し、彼が「強い嫌悪感がある交易」とよんでいた奴隷応益を終わらせることを望んだ。しかし併合は他にも商業的な利益があると考えられていた。



図 15 パーマストン卿の肖像画

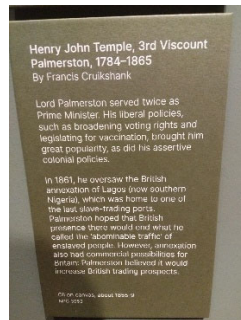


図 16 図 15 の解説

E, グラッドストン

グラッドストンは自由主義の内閣総理大臣として四度就任した。彼は自由主義政策の象徴的な存在となった。その結果彼は労働者階級、中流階級の間で指示を集めた。彼は普遍的な初等教育を推進し、アイルランド自治法案運動や男性選挙権の拡大に貢献した。彼ははじめ大西洋の奴隷貿易廃止に反対していた。彼の父親はイギリス屈指の大奴隷貿易商でありその影響で彼もそのような立場を取っていた。

奴隷制廃止のときスコットランド生まれの商人のグラッドストンは 3277 人の奴隷のために財政的な要求を行った。彼は約£100,000 を受けとり、この金額は大英帝国政府の最大支出の一つとなった。結果全体の支出としては約£2000 万となり、年の 40%の支出となった。しかし奴隷への金銭を送ることはなかった。

国会議員になったときは、グラッドストンは一貫して奴隷制を続けるように圧力をかけていた。

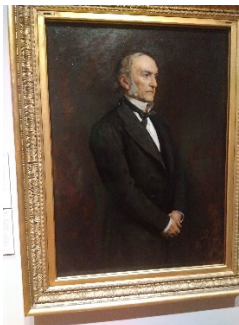


図 17 グラッドストンの肖像画

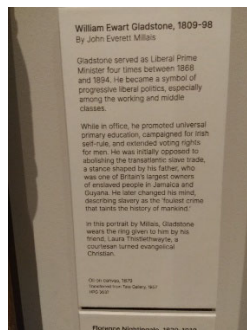


図 18 図 17 の解説

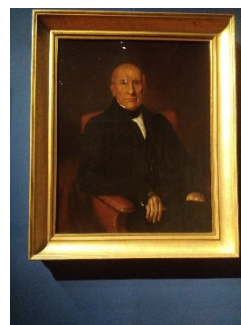


図 19 グラッドストンの肖像画

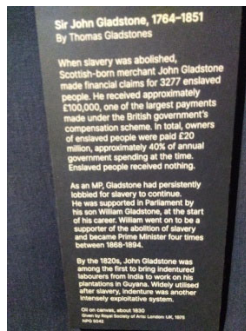


図 20 図 19 の解説

F, ディズレーリ

ベンジャミン・ディズレーリは保守党党员で, 自由主義者のグラッドストンとは精力的なライバルとして有名となった。政治家としてだけでなく小説家としても有名なディズレーリはユダヤ人の家系から生まれた。

彼は労働者階級に選挙権を拡大し, 公共保健基準を設けた。また彼は帝国主義的な政策を推奨したり, 1877 年にヴィクトリア女王の「Empress of india」を主張し, 領土を拡大したりした。

ディズレーリは病気に伏せるとあっけなく亡くなってしまった。

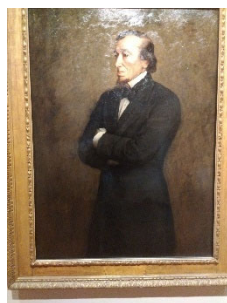


図 21 ディズレーリの肖像画

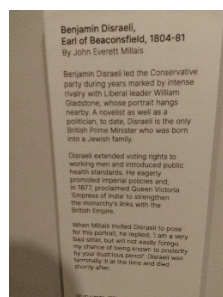


図 22 図 21 の解説

G、その他

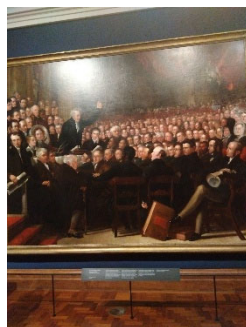


図 23 奴隷制廃止の議論している議会



図 24 セントヘレナのナポレオン

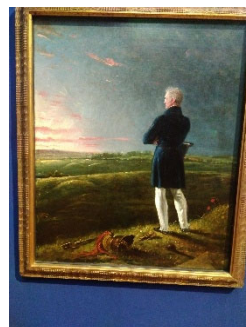


図 25 ワーテルローを望むウェリントン

4, Tate ブリテン



図 26 チューナーの肖像画



図 27 トラファルガーの海戦, 1805 年 10 月 21 日

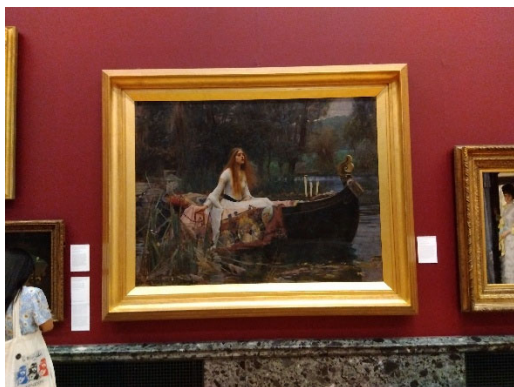


図 28 シャロットの女



図 29 カーネーションリリー、リリー・ローズ

図 26 のチューナーは、イギリス人画家としてトラファルガーの海戦に従軍し直接その戦闘を描いた。つまり当時の装備品がそのまま描かれている。また当時のトルコやヨーロッパを周遊し、各地の風景を描いた。

図 28 などは当時の風景や華やかさを表現していたり、美的感覚に即した田舎の風景が描かれた絵画が描かれており、街の様子などが描かれるケースが多い。しかし政治家のようなものは描かれておらず、研究内容に活かせるものは少なかった。

5, 大英博物館



図 30 ヴィクトリア女王の金の祝典

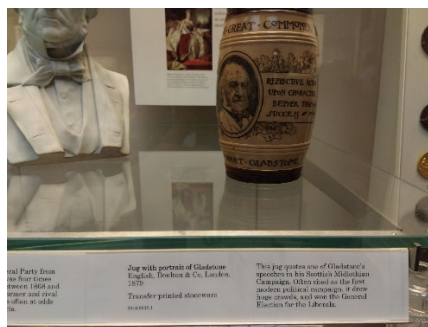


図 31 グラッドストンの肖像画が書かれた樽

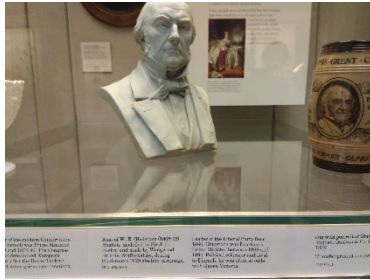


図 32 パーマストン卿の胸像

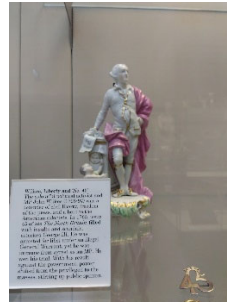


図 33 ジョン・ウィルクス, 自由主義と No45

グラッドストンは1866年から自由党の党首を務めた彼は四度首相に就任し、ディズレーリとライバル関係にあったが、ヴィクトリア女王ともしばしば対立した。図31の樽にはスコットランド・ミッドロージアン選挙運動で行った演説の一つを引用しており、初代の近代的な選挙運動としてしばしば引用され、多くの聴衆を集め、総選挙で自由党が勝利した。樽には性格に対する熟考は成功よりも優れていると書かれている。

ウィルクスは多様な政治活動家で国会議員でもあった彼は公民権と報道の自由の擁護者であり、アメリカ植民地の英雄でした。1763年彼の雑誌でスキャンダルを出し、ジョージ3世を攻撃した。彼はその後名誉毀損で逮捕されたが、国会議員であるために釈放された。裁判でも勝利したが、政府は彼の特権階級としての地位を剥奪して大衆階級に移行させられ、世論を掻き立てられた。

6, 大英図書館

以下の本をPDF化した。

- 1, A Series of Letters of the first Earl of Malmesbury, his family and friends from 1745 to 1820. Edited with notes, etc., by his grandson, the Earl of Malmesbury
- 2, Corn law prose
- 3, Don Pacifico the acceptable face of Gunboat diplomacy
- 4, George Canning
- 5, Gladstone and Disraeli
- 6, Landmark negotiations from around the world
- 7, Milestones in modern world history the Congress Vienna
- 8, Naval leadership in the Atlantic world the age of reform and revolution, 1700-1850
- 9, Palmerston
- 10, Probably operation and effect of the repeal of the duties on foreign corn
- 11, Promised lands
- 12, Sir Robert Peel

- 13, Speech of sir Robert Peel, Bart
- 14, Speech of the Right Hon
- 15, Speeches and Addresses of Edward Henry XVth Earl of Derby
- 16, The age of improvement 1783-1867
- 17, The corn laws a National evil
- 18, The foreign policy of Castlereagh 1815-1822
- 19, The forgotten prime Minister
- 20, The maintenance of the corn laws essential to the general prosperity of the
email
- 21, The struggle for Asia 1828-1914 a study in British and Russian imperialism
- 22, Wellington's history of the peninsular war
- 23, Whig's and Wiggins political writings
- 24, A Series of Letters of the first Earl of Malmesbury, his family and friends
from 1745 to 1820. Edited with notes, etc., by his grandson, the Earl of
Malmesbury.
- 25, Charles James Fox : English Whig statesman : M.P. for Malmesbury 1774-1780.
- 26, The Speech of Viscount Palmerston, in the House of Commons, the 19th
April ... on the Civil War in Spain.
- 27, Speeches and Addresses of Edward Henry XVth Earl of Derby
- 28, The forgotten prime minister : the 14th Earl of Derby
- 29, The Corn Laws a National Evil; being an address to the public, showing the
injury which these laws inflict upon all classes of the community. By a member
of an Anti-Corn-Law Association, in the Hundred of Bassetlaw.
- 30, Castlereagh.
- 31, The Congress of Vienna
- 32, Metternich : strategist and visionary
- 33, The struggle for Asia, 1828-1914 : a study in British and Russian imperialism
- 34, The Congress of Vienna and its legacy : war and great power diplomacy after
Napoleon
- 35, Wellington's history of the Peninsular War : battling Napoleon in Iberia
1808-1814
- 36, The Foreign Policy of Castlereagh, 1815-1822, etc.
- 37, Wellington : [papers]
- 38, Whigs and Whiggism : political writings by Benjamin Disraeli, 1833-1853
- 39, Landmark negotiations from around the world : lessons for modern diplomacy
- 40, Promised lands : the British and the Ottoman Middle East

41, Naval Leadership in the Atlantic World : The Age of Reform and Revolution, 1700-1850

42, The age of improvement, 1783-1867

(1) 収集した本の傾向

今回収集した本の種類としては 1820～1870 年の外交政策だけでなく、議会史、法制史についてのものを集めることで、事件史や干渉政策でなぜそのような行動を取ったのかなどの要因を知る手立てとした。

他にもそれ以前の政治家についての史料を集めることで政治概念や外交政策の背景にある価値観や思想を理解できるようイギリスの教授方におすすめされた文章を中心に集めた。

(2) 現段階で読み終えた書籍のまとめ

パーマストンは外相としてグレイ内閣やパーシバル内閣で活躍している 1830 年代 40 年代でもすでに干渉政策とは軍事介入のみを指すのではなく、経済や国際協調による圧力で他国を働かせることであって、フランスとロシアの拡大を恐れており、特に地中海へ進出しようと考えているロシアに対してはインド貿易の障害となりえると考えており、強い不信任感を持っていた。

またパーマストンは確かにイタリアなどの非列強国には海軍を出動させることもあるが、基本的には会議を開いたり、列強諸国と前もって交渉することでともに圧力をかけることで平和を維持しようとしている。

他にも彼の国内人気は愛国主義によるものであった。その上彼はマスメディアつまり当時は新聞社と良好な関係を築いており、保守党や自由主義者、ヴィクトリア女王から非難を受けたとしても、国民に渡る情報はパーマストンを支持するものであったため自由党は第一党となり、彼は内閣総理大臣に就任することができた。がしかし他の大臣例えば外相と言った重要な要職は自由主義者や反パーマストン派閥によって取られてしまっていたため、第一次と第二次では大きな変化が現れていた。

7, 国立文書館

収集した文書

1, F0352 31

2, F0353 25B

3, F0519 91

4, F0528 24

5, F0528 26

6, F0538 30

known and as the result
of his definitive answer to
Despatch, if it is from other
sources, to be sent to J.E.
and the intelligence - I was
inclined to think that the
Spanish Legation had
happily forwarded this General
Simón, but I will object
in every possible manner
to his nomination, for I foresee
many difficulties should it
take place - however the
state of the position must also be

Private
Theans
1/10/1882
Dear Sir
I spoke to the Minister
for foreign affairs this morning,
and urged on him the necessity
of naming without any further
delay, the Commission for
the denunciation of the position.
and he promised me that
he would speak to the General
W. Hamilton.
Yours faithfully
Sir Herbert Curzon, G. C. B.

7, H045 4738

8, H045 OS1982

9, PR030 22 105

10, PR030 22 106

11, PR030 22 117

12, PR030 39 2 7

13, PR030 2226

(1) 収集した文書について

今回収集した文書は基本的にフランスやイタリア、トルコのイギリス大使館からパーマ
ストンや外務大臣へ送られた手紙や文通です。しかし当時の文字の書き方のクセや彼ら自
身も字をあまりきれいに書いておらず、解読するのに時間がかかっているのが現状で文書
館で取捨選択を行うことが難しかったため借りれるものを一つでも多く集められるように
PDF化したため一貫性のない主題が収集されている可能性はある。

and if possible arrange this
affair within the next ten
days, but that the General
at this moment was so
engaged with other matters
of so serious a nature, that
it had not had time to give
it due consideration. W.H.
then proposed that General

he would name some Mexican
which he promised to arrange.
He pointed out to W.H. the long
delay that had already taken
place, and that he required
a definitive answer as soon
as possible, the season being
so far advanced - and I
also mentioned to him that

then proposed that General
Lemius & Frenchman / whom
I mentioned D.G.E. in a former
letter / should be appointed
for this side, But, I
decidedly objected, and suggested

There would be no objection.
I shall see the Amer

The Mexican Commissioners
should proceed at once to

まとめ

1, 日本での研究とイギリス人研究者との違い

(1) 日本人研究者

日本人研究者で外交史, 議会史としてパーマストンについての研究をしているのは君塚直隆教授のみであるが, 彼自身のメインテーマはイギリス王族研究であり, 彼も 1, 2 回研究論文を書いた程度である。

その論文の中ではパーマストンの干渉政策を止めていた要因として保守党, 王族であるという見解を強めていた。

保守党党首ダービーはパーマストンと密約を結び, 干渉政策を辞める代わりに国内政策で協力関係を築いた。そのため第二次パーマストン内閣では軍事力を使った圧力と言った高圧的な外交をやめ, 調停役としてロンドンで会議を開き, 各国の利益を尊重したうえで平和を維持しようと動いた。またヴィクトリア女王はパーマストンの強硬政策は各国との関係性を悪化させ, ドイツと対立することを極度に嫌っていた。としていた。

(2) イギリス人研究者

イギリスではパーマストンを何処かの党や王族が止めたのではなく, 斜陽気味のイギリスでは軍事介入などの介入政策で解決できる問題が減っていき, 会議を開くことでイギリスの影響力を維持また利用することで平和を維持していたとの見解を示していた。

議会に内でパーマストンの愛国的な演説は保守党のリベラル派の人々を引き付け, 自由主義者の中の愛国主義者たちを味方につけた。そのため議会内で彼を止めることは叶わず, また自由主義と保守党は根本原理が大きく異なるために彼らが協力関係を構築することは難しかったため干渉政策に積極的であったが, イギリスが強力であったのは海軍であり, プロイセンやロシア, フランスといった陸軍国家に対して陸上戦で勝てなくなってきたという面を強調し, これこそが彼が軍事介入をやめた原因であるとしている。

また王族は確かに干渉政策に反対していたが, 彼らに政治的な影響力は革命によって完全に失われており, 彼らが非難したところで政策を止めるほどの大きな影響力は残っていないと考えていた。その上パーマストンとヴィクトリア女王の仲はそこまで悪くなく, 愛人関係を続けている私生活のだらしなさやジョージ 3 世時代の政治感とヴィクトリア女王時代の政治感のギャップが批判を産んだだけであると考えられている。

2, 今後の展望

現在外交史や海外関係史といった面でしかこの時代のイギリスを見れておらず, 特に戦争や軍事介入などの事件史からみたパーマストンでしか発表ができていなかった。しかし今回の調査のおかげで議会史, 人物史や法制史といった多くの観点を集めることができたのでここからより深く研究を行うことができるようになった。

また日本人研究者は数が少なく, 偏って視点で研究をしていたことが良くわかったので

これからは多くの人々の見解を取り入れたより客観的な研究が可能になったし、インタビューを行った教授方には調査終了後もメールを使って質問をして良いと承諾を受けたので、調査を通して入手した書籍だけでなく、日本国内でダウンロードできるもの彼らから進めていただいたり、集めることによってようやく他の方々と同じように研究を進めることができるようになりました。